

日本中国語学会 第60回全国大会を開催して

松 村 文 芳

2010年11月13日（土）、14日（日）の二日間、神奈川大学の16号館2階セレストホールと23号館の1、2階で日本中国語学会第60回全国大会が開催されました。

大会は日本中国語学会事務局（京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室内）、大会運営委員会（委員長：岩田礼金沢大学教授他10名）、大会準備会（代表：加藤宏紀神奈川大学准教授）で構成される大会本部を中心に実施されました。

大会は11月12日（金）に開催された理事会を皮切りに13日（土）の評議会、開会式、学会奨励賞授与式に続き、午後13：15から16：45まで「中国言語学の新潮流」と題したシンポジウムを三名の招待講演者により挙行了しました。

最初のスピーカーはスタンフォード大学の孫朝奪教授で「現代漢語把字句的形成」と題して、現代中国語の処置構文の成立を『祖堂集』や『朱子語類』等の歴史資料のデータを根拠に説得的に論じました。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校のJerome Packard教授は第二講演者として言語学的認知科学的方法論にもとづき "The Morphology of Chinese" を中国語の単語は統語論記述をベースにしたものではなく、"the bound-free and function-content identities"によって記述されるべきであ

ると主張しました。Packard先生は英語で講演されましたので通訳は神奈川大学英語・英文学科の佐藤裕美先生にお願いいたしました。

第三講演者は中国社会科学院哲学研究所論理学研究室主任の鄒崇理教授で、「自然言語の形式意味論のいくつかの研究モデル」、と題して、研究モデルを「言語学をベースとした研究モデル」、「伝統的論理学に準拠した研究モデル」、「論理学と言語学を総合した研究モデル」に分けて詳しく紹介し、中国語に適用して論じました。

孫朝奪教授の講演は中国歴史言語学に新鮮なアイデアを提供し、Jerome Packard 教授は中国語形態論にユニークな、また盲点をつく手法をもたらし、鄒崇理教授は論理学者の立場から、現代中国語の意味研究に重要な指針を与えてくれました。この日はまたポスターセッションが七名により実施されました。

大会二日目は23号館で9：30から六会場を使用し、一会場あたり11名の発表者による研究発表が行われました。

第一会場は午前・午後共に音韻部会、第二会場は午前・午後共に歴史語法部会、第三会場は午前が教育部会、午後が現代語法部会（1）、第四会場は午前が現代語法部会（2）、午後が現代語法部会（3）、第五会場は午前が現代語法部会（4）、

午後が現代語法部会（５）、第六会場も午前と午後
にそれぞれ現代語法部会（６）、（７）の分科会
に分かれて、研究発表と活発な質疑応答が行われ
ました。

開催校の神奈川大学からは彭国躍教授が第４会
場の現代語法部会（２）において「現代中国語の
色彩語とメタファー ― 下位概念化の認知意味論
的考察 ―」と題して発表を行い、また外国語学研
究科中国言語文化専攻博士後期課程院生の鈴木進
一氏が「大陸と台湾における指示詞の対照研究 ―
"這・那" の距離認識の相違について ―」というテー
マで研究発表をしました。

大会開催にあたっては大会準備会を計八回にわ
たって開き、中国言語文化専攻の言語部門担当の
三名の教員と博士前期・後期課程の大学院生の献

身的な協力のもと、中国語学科ゼミ生多数の支援
を得て、二日間にわたる会場案内、参加者受付、
クローク荷物預かり、懇親会受付、研究発表六会
場におけるタイムキーパー、プロジェクタ使用補
助等の業務を無事こなすことができました。

今回の大会開催と同時にＡＰＥＣの会場が「み
なと未来」に設定されたため、宿泊できるホテル
が不足しましたが、開催校代表である加藤宏紀先
生の機転で早めに手配したため、何とか切りぬけ
られました。また加藤代表は招待講演者三名の航
空券の手配、宿泊場所の設定予約、大会予稿集の
作成から会計処理までのすべてを超人的に処理し
てくれました。同氏の御尽力により全国大会が大
きな成功を納められたことをここに特記して、開
催報告といたします。
